

湯葉・隅田川
芝木好子

新潮文庫



湯葉・隅田川

定価 220 円

新潮文庫 草 140 A

昭和四十年二月二十五日 発行
昭和五十四年四月三十日 十二刷

著 者 芝木好子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)(二六六)五一
編集部(〇三)(二六六)五四二
振替 東京 四一八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

湯 葉 ・ 隅 田 川

芝 木 好 子 著

目次

湯

葉

7

隅

田

川

107

解説 瀬沼茂樹

湯葉・隅田川

湯

葉

房州に那古船形という土地があるそうだが、私はまだ地図をだして見たことがないので解らない。そこに「崖の観音」とよばれる場所があつて、海に面して展けた崖のきわにちいさな観音堂があり、その近くのささやかな墓地に正藤そめの墓があつた、と祖母は私に語つた。祖母は一度だけまだ十三四の娘だった私の母を連れてそこへ墓詣りにいったそうである。

東京に最初の空襲のあつた戦争中のある日、見舞やら疎開の報告やらで私が神田の母の生家を訪れると、祖母は顔をみるなり房州のことを口にして、一度那古船形へゆきたいものだといつた。空爆が今後もつづくことは確実で、もう老人が汽車に乗るのは疎開のとき以外不可能に思われた。祖母もそのことは知っているのだろうが、崖の観音などと語っている調子はのどかであつた。切羽詰つたときも人よりさきに感情を抑制してしまふし、闊達な気性の人なので、聞いてみると今にもゆけそうでこちらの気持も和んだ。正藤そめは祖母の伯母で、孝明天皇の皇妹和宮が徳川家茂に嫁してから明治十年に三十一歳で歿するまでその祐筆をつとめた、静寛院の宮付の人であつた。そめ女がどうして房州へ落ちて、そこで人知れず終つたか祖母も多くを知らないから、私には一層解らない。それまで二階の奥座敷が祖母の部屋であつたが、防空壕へ降りるのは

たいへんだという理由で、階下の土蔵倉に隣接した居間へ祖母は移された。下町の庭はあるかなしの狭さである。裏は露地で、家が密集している。倉のまへの石畳みに植わった篠竹に白い光が斜めに射すのを、祖母は仰いでたのしんでいる。篠竹のわきは防空壕で、蓋をあけて穴蔵へ降りてゆくしかけになっている。祖母はもう何回もその防空壕へ運ばれた。ながい人生の終りが防空壕に結ばれているのは祖母にとっても味気ないことであろう。祖母はこの古い家への執着が強いらしいが、私は早くどこか安全な場所へ行ってくれればよいと思った。生を享けて七十年も東京以外に住んだことのない老女が、人に担がれてゆくのは辛いだろうが、それは日本人の宿命になっている。祖母はそういう心の重荷のためにそめ女のことなど持ちだして、どこで死のうと一生は一生だと思い決めているのかと私は思ってみた。

警報はその日倅いにも鳴らなかった。祖母は私が姑たちと疎開するのを知ると、今日は泊ってゆくようにとすすめてくれた。一時は二十人あまりも住んでいた家が、今は祖母と伯父夫婦だけになっているので、どこかさびしい。その晩、持参の弁当をつかうとき、祖母と伯母はあれこれ気を配ってくれた。この人達は忙がしい生活に馴れてきたので、手速く作ってくれる惣菜や漬物が大層うまい。伯母の運んできた清汁椀には菜っぱのほかは湯葉がはいっていた。

「まあめずらしい、ゆば」

と私は声をあげ、椀に見入った。湯葉は島田ゆばであった。もう東京に滅多に湯葉をみることもないときに、祖母はどれほど丹精して保存しておいたものかと思った。祖母は老いても肌理の

こまかい小ぶりの顔にうれしそうな笑みを泛べて、

「源さんの息子が最後の釜であげたといつて持ってきたものですよ」といった。

伯母もまじえて私達は思い思いに湯葉を語りあい、汁をすすった。湯葉は私の母の秋津が生前よく食膳にのせたので私は好物である。湯葉は黄褐色に縮れて蝶形に結ばれ、舌ざわりは少ししこつて、しかも柔らかく、特有のほろい渋さと仄かな甘さをたたえた味わいには、床しい滋味があつた。湯葉はもう私達の日常から姿を消した食品の一つだが、そのことを祖母は自分の罪でもあるように感じてゐる節がある。昔の湯葉に纏わる話を祖母は一夜私に語つたが、それは祖母の生きた日の形見であろう。もし祖母がある詩人のうたつた、

わが草木とならん日に

たれかは知らむ敗亡の

歴史を墓に刻むべき

という詩を知つたら、それは私のことですよといつたに相違ない。祖母は明治七年生れ、名は露、そのとき七十一歳であつた。

牛込矢来の家から神田須田町にでるためには、当時大曲を経て神田三崎原とよんだ草蓬々の原っぱを抜けてゆくか、駿河台地の北を崖について下つてゆくか、その二つであつた。明治二十一

年のある初秋の一日、正藤主馬と娘露は人力車に乗ってお茶の水の崖上まできた。このあたりの崖下は百尺に及ぶ溪谷で、鬱蒼と樹木に覆われながら底に川を抱いていた。川は神田川で澄んだ川面に小舟が渡っていた。主馬はこの人通りの少い崖際までくると俵を停めさせて、露にも一息入れるようにといった。茗溪とよぶこのあたりの自然は翠色滴るばかりで、露にも目を洗う清々しさであった。夜になると狐の啼くさびしい崖合に、朝靄が切れて陽が耀いていた。もうここからお茶の水橋を渡って暗闇坂を降りてゆけば、すぐ須田町に出る。主馬も露もまだ美濃屋の構えをみたことがなかったが、露は今日そこへ養女としてゆくことになった。主馬は数えて十五歳の娘を顧りみて、

「疲れたか」

とたずねた。顔も身体も小ぶりで前髪のちいさい髪に結い、美濃屋から届いた鳶八丈の着物にお染帯を締めた露は、疲れなどみたくもない艶々した頬と黒く光った瞳をもち、活気にあふれた表情をしていた。露には自分が他家へゆくよりも衰えた父を残すことのほうがはるかに気懸りであった。主馬はこの十年間に人生から脱落していた。まだ小石川安藤坂に住んでいた円かな時代、その邸から十歳年上の姉が打掛を着て嫁いでいったのを露はおぼえていたし、母と伯母が語らっていた明るい光景も記憶に残されている。しかしその後その家を捨て、転々と居を移すにつれて逼迫していった速度はおどろくばかり速い。徳川家瓦解のあとの祿を離れた人達はみなこんなだったろうか。露が十三歳から住みついたのは矢来やらいの崖下の柳長屋であった。崖にもたれて並

んだ長屋の足許を土止めして、その下にさらに低い長屋が並んでいる地帯である。細い石段一つが通路で、長屋門のわきに柳が植わっていた。その通路の真中に共同井戸があつて、路はそこにかがんでちいさな手で米を磨ぎ、洗いものをした。米のある日はよかったが、なににもなくなると路は途方に暮れた。主馬は食膳がでない、そうかといつて黙っている。主馬は子供に読み書きを教えていたが、生計が立たなかつた。この界隈の地の理からいつて無理だつた。やがてゆき着くところへくると、彼は江戸を捨てる氣になつた。長女の婿が士分を離れたとき、政府から下賜された土地へ移つて静岡にいる。そこへゆけば死水はとつてもらえた。主馬が路を手放す氣になつたのは、娘一人だけでも江戸へ残しておきたかつたからである。

はじめ主馬は亡き妻の妹に相談して戸田邸へ出したいと考えた。そのとき美濃屋の話が降つて湧いたのだつた。美濃屋の内儀は妻とは従姉の關係で息子一人しかなく、かねて身内から女の子を欲しがっている。路なら利発だからよからうというのだつた。主馬は決めかねて戻つたが、戸田邸へやる氣だつた。しかし路は「戸田様へゆくか」という問いには無言で、「美濃屋がよいか」と訊かれると「はい」と返事をした。主馬は理由をたずねたが、路はただなんとなく美濃屋のほうがいと感じたのだつた。

「自分で選んだのなら、それでよいだろう」

と主馬は氣弱くいつた。

娘を伴なつて駿河台地を見納めることが、主馬の江戸の見納めになつた。崖下の川は目が眩む

ほど底深い川面であった。

「美濃屋の主人は一代で産を成した人だけに大層厳しい、仕事一徹の人だそうだ。しかし内儀は助けてくれるだろう。どこであれ、これからゆくところが路の家だ」

主馬はそれだけいって、俥に乗った。

お茶の水橋を渡って大名屋敷のある高台から町中へ降りてゆくと須田町はもうすぐであった。銀座から日本橋を経、神田須田町のめがね橋(万世橋)を渡って御成街道を上野へ、さらに浅草へゆく道筋は、明治年間から大正へかけて東京の主要な繁華街をぬう幹線道路であった。下町の殷賑ぶりを反映して商家も瓦葺土蔵造りの家が多く、隅田川にそそぐ川筋が途中に引かれていた。神田須田町は人の往来が繁く、当時東京一の交通量を誇っていた。美濃屋は須田町の表通りを一つ逸れた横通りの角にあった。二階建ての堅牢な土蔵壁で、窓はちいさく観音開きにそとへ開いた。階下の店先は入口に暖簾が掛けて、暖簾は濃茶に「湯葉」と白く染めぬいて、左端に美濃屋と記してあった。路はそのときまでこの店がなにを商う店かも知らなかった。そとからくると店のなかは小暗かったが、ざわついている気配のなかで、大豆の煮立った甘くあたたかい匂いがたゆたっていた。

店の内は土間が左へ鉤の手にずうっと伸びて、仕事場に通じていた。片側は店から帳場、奥の間とつづいていて、途中の廊下に階段がついていた。左手の土間の奥は厨で、そのわきに掘井戸があり、そこからさきは広い仕事場であった。主馬と路は奥の間に通された。そこは狭い庭に面

していて、渡り廊下の端から仕事場の横にかけて土蔵があった。そのとき歌は髪結に髪を結上げさせたところであった。女にしては大柄の面長な四十四五の年配で、眼尻のやや釣上った顔はきつくみえた。商家の内儀らしく黒襟のかかった袴で、髻には浅黄の手柄が掛っていた。歌は路を最初に一瞥して、

「ちいさな娘だね」といい、「身体は丈夫だろうね」と念を押した。

路は怯んだが、自分で選んできたことを忘れまいと考えて、

「はい」と返事をした。

「店は忙しい商いだから、確かに働いてもらいますよ」

歌は癩性に襟へ手をやって衣紋をつくりながら、主馬にむかって商家の休みのない日常を愚痴とも自慢ともつかず喋った。その合間にも女らしい吟味の眼差を路へそそいだ。土間からは若い衆が生湯葉を運び、女中が受けて二階へ運んでゆくのがみえた。歌はその指図をした。中の間には乾燥した湯葉を加工している女中の姿がみえたし、歌のまわりにも湯葉の入った籠があつて、やりかけのままになっていた。歌は坐ったままで女中たちの名をよび、つぎつぎと用を吩咐けた。女中がいないと店の小僧をよび、客の姿にも敏感で、あちこちに目を配っていた。その合間に主馬へいつ静岡へ発つかとたずねたり、路に縫物はできるかと問うたりした。恐らく問う端から忘れるだろうと思うほど、せわしない応対であった。家全体ががさつなほど活気に充ちた空気で、落着く暇もなさそうであった。路はそのことに驚きながら目を動かして、早くその状態に